

## テモテ第二2章1-13節 「キリストの兵士」

### 1A 共にする苦しみ 1-7

1B ゆだねる教え 1-2

2B 立派な務め 3-7

### 2A イエス・キリストの福音 8-13

1B つながれていない御言葉 8-10

2B 共に生き、死ぬ 11-13

## 本文

テモテへの手紙第二2章を見ていきます。私たちは前回、パウロがローマの牢屋の中からテモテに手紙を出したことを学びました。皇帝ネロの前で弁明をしましたが、彼は無罪になったようです。けれども二回目の弁明のとき、彼は死刑に定められることになっていました。パウロとともに労していた働き人たちのほとんどが、パウロから離れてしまいました。パウロが建て上げた教会では、違った教え、偽りの教えが入り込んでいました。実に、パウロとともに働いていた人たちの中からも、偽りの教えをする者がいました。そのような暗やみの中にパウロがいたことが、この手紙の背景となっています。パウロは、自分が死刑の処せられる前に、テモテをエペソから呼んで、最後の時を彼とともに過ごしたいと思っています。

パウロのテモテへの言葉は、1章 13-14 節にあります。「あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全なことばを手本にしてください。そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。」パウロのこういった苦しみの中で、テモテの心がしぼんでしまわないように彼は注意を払いました。パウロが囚人であることも、主にあってそうなのであり、恥とすることはないようにと諭しています。そして2章で、続けて自分の信仰の息子であるテモテに、愛情を込めて指示を与えていきます。

### 1A 共にする苦しみ 1-7

1B ゆだねる教え 1-2

1 そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。

テモテにとって必要なこと、また主に仕えている中で必要なことは、これです。「強くなりなさい。」であります。私たちは、主の働きの中に従事すると霊の戦いの中に入ります。あの手、この手を使って、私たちが落胆し、あるいは罪への誘惑し、その奉仕をすることができないようにさせてしまいます。霊的に弱ってしまった私たちに必要なことは、単純です。「強くありなさい」という励ましで酢。主に仕える僕たちは、聖書の中で、神から「強くなりなさい」という励ましを受けます。モーセがいなくなり、ヨシュアが独りになった時に、主はヨシュアに言われました。「ただ強く、雄々しくあって、

わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行なえ。(ヨシュア 1:7)」パウロも間もなくこの世から取り去られますが、同じようにテモテに対して強くありなさい、と励ましています。

そして、ここで大事なのは、「キリスト・イエスにある恵みによって」と言っていることです。テモテの頑張りによって強くなりなさいと言っているのではないのです。自分の頑張りが足りないから、こんなことが起きているのだという悪い反省はしてはいけません。もっと伝道していないから、このような悪い状況が起きているのだとか、自分ももっと何かをしなければいけないと思って強くなるのではありません。むしろ反対です。イエス・キリストがくださったこと、この方の恵みによって強められます。私が、年初めにアメリカで行われる宣教大会で励まされるのは、このためです。賛美から始まりますが、神がいかにすばらしいのか、どんな恵みを注いでくださったのか、キリストの御業をほめたたえる歌をうたっている内に、心が強められます。そして説教は、「あなたがたは、こんなことをしていないから、しなさい。」というのではなく、「神がここまで導いてくださった、神がしてくださいました。」という恵みを語ってくれます。

2 多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。

パウロは他の教会の指導者たちと共に、テモテに手を置いて、そうすると預言によって、テモテに聖霊の賜物が与えられたことが告げられたという時があったのだと思います。そこでパウロは、テモテに数々の健全な教え、しなければいけないこと、語らなければいけないことを教えたものと思われる。それが、「多くの証人の前で私から聞いたこと」ということです。

テモテは、パウロから「そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。」と言われていますが、パウロはテモテ自身のみならず、今度はテモテから次の世代、また次の世代に受け継ぐことも彼に教えています。ここに、なんと四つの世代が含まれています。第一世代はパウロ、第二世代はテモテです。そして、テモテが「教える力のある忠実な人たちにゆだねるのですから、その教師たちが第三世代です。そしてその教える者たちの教えを聞いている第四世代がいます。したがって私たちは常に、「信仰を継承していく者、継承させていく者」という自覚が必要です。自分は主の教えを聞いていると同時に、それは即、その教えによって良い意味で影響を受け、その影響によって周囲の人々にも影響を与えている者なのだ、という自覚です。伝道であれ、弟子作りであれ、祝福を受けた者が、その祝福を分かち合っていくという責務を私たちは担っています。

そしてここに、そのように教えることのできる者たちの、最も重要な資質をパウロは書いています。「忠実な人たち」であります。主の務めを行なうことができるかどうかの、最も大きな境目は忠実さです。自分は、こんなことができるのにという不満を抱く人がクリスチャンの間で多いのですが、いざという時に、そこにその人はいるのかいないのか？ということが最も大事な要素となってきます。

母親が子供に食べ物を作るのに、特別な料理の技術よりも、その子のためにいつでも早く起きて、ちょっと風邪を引いていたとしても作ってあげて、いつでも用意してあげるという忠実さが、母親が母親である所以です。それと同じように、主からゆだねられた事柄に忠実であることによって、主がタラントの喩えで語られたように、多くのものを主人は僕に任せてくださいます。

## 2B 立派な務め 3-7

そして、パウロはテモテに、三つの喩えを話します。それは奉仕の務めを担っている者たちにとってとても必要なことです。自分が何を行なっているのか、自分は何者なのか、その定義をしかりさせることはとても大切です。

3 キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをとみにしてください。4 兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。

初めに、「キリストにある兵士」であります。二つの特徴があります、一つは「苦しみや困難がある」ということです。もう一つは、「徴募した者を喜ばせる」ということです。これは、私たちキリスト者にとって非常に必要とされる自己認識です。「コロサイ 1:13-14 神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」私たちが愛する御子の支配に入ったということは、神が暗闇の圧政から私たちを奪還したからに他なりません。したがって、私たちの信仰は本質的に、「霊の戦いの中に入る」ことを意味します。御霊によって新しく生まれることは、この世から贖い出されて、神の国に生きる者となっています。悪魔の国の中に神の支配が攻め入っている状態です。その最前線に、私たちキリスト者は置かれています。

したがって、私たちに対して敵からの反対があることは、至極当たり前のことです。反対の力があることは、むしろ信仰の戦いが前進していることの印です。そして私たちは常に、勝利している立場にいることを確認することが必要です。「ローマ 8:35-37 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあつても、圧倒的な勝利者となるのです。」そして、私たちはしっかりと神の武具を身に付けて、自分を守り、また相手を攻撃する必要があります。「エペソ 6:10-13 終わりに言います。主にあつて、その大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。」したがって、私たちが第二次世界大戦で、連合軍

とドイツや日本のような枢軸国であれば、どちらかであるかと言いますと、連合軍なわけですが、激しい抵抗を受けますが、勝利する側、奪還する側、征服する側にいます。

そして、そこで大事なものは 4 節です。自分の都合を優先させてしまえば、上官を悲しませ、苦しませることになりますし、また共に戦っている仲も悲しませることになります。ピリピ人への手紙の中でも、パウロはそのことを話していました。1 章において、信仰において共に奮闘して、反対者に脅かされることのないようにするという話を、2 章でこう言っています。「2:3-4 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。」そして、パウロの他にテモテぐらいしか、ピリピの教会の人たちが通っている苦しみを考えていなかったのですが、このように言っています。「ピリピ 2:20-21 テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもないからです。だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。」キリストを求め、他者を顧みる、そこに主にある喜びがあるというのが、ピリピ書の主題でした。

5 また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。

主の働き人の二つ目の定義は、「競技者」にあります。競技者については、パウロは数多くキリスト者信仰についての喩えを使っていました(例:1 コリント 9:24-25)。当時のオリンピックでは、それぞれの選手が、最低十カ月の訓練を受けたという誓いを立てさせるそうです。賞を得るために、厳しい訓練を受けます。そして、今のオリンピックならばドーピング検査に引っかからないように、選手は風邪薬も飲まないというような注意深さもあります。同じように私たちは、キリストの下さる賞を得るために走っています。目標地点まで向かうため、私たちは自ら、置き去りにすべきものは置き去りにし、自分の歩みにつまずきになるものは自分の前に置かない決断が必要です。

私たちがこの信仰の行程を歩む時に、聖霊の助けが必要です。聖霊は、そばにいて励まし、慰めてくださる方です。そして聖霊の住まわれる教会では、その励ましを体現していかなばなりません。私たちがいつも、走っているのだ、競技をしているのだ、あるいはその練習に臨んでいるのだということを知ることは必要です。その霊的鍛錬の中で私たちは、キリスト者として初めて機能できます。

6 労苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです。

これが三つ目の喩えです。「農夫」ですが、「労苦した農夫」であります。愛の労苦と言ったらよいでしょうか、私たちは神の畑の中で働くという恵みにあずかっています。私がまだ教会に対して、参加者でしかなかった時、礼拝に出席して、それで終わりだった時、それはそれで主の恵みを知りましたが、それから一歩踏み出して、人々に恵みを分かち合っていく中で、そこには与える恵みが

あることが分かりました。ある牧師さんが、キリスト教の世界を野球の試合に球場に喩えて、「イエス様のファンなのか、それとも選手なのか？」という問いかけをしていました。ファンであれば、応援はしていますが、結局は自分に良いサービスをもらえるかどうかという判断基準で動いています。けれども選手は、その野球そのものに関わっています。神の御霊がなされる業の中に、自分が置かれています。自分の目の前で、主が何を行なわれているのか、それを見る恵みにあずかっています。

そして農夫の労苦には、神にしか頼ることのできないという面を強調しています。天候があります。自分ができることは限られています、天に任せてという部分が大きいので、これは神ご自身の働きであり、神の教会であり、神の御心に従って事が進んでいくものであり、私たちは労苦して働きながら、最新の配慮を払いながら、それでも神を信頼するという姿勢が必要になります。

そして、「まず第一に収穫の分け前にあずかるべき」とあるように、労苦には必ず報いがともないます。「ヘブル 6:10 神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」神は決してその愛の行ないをお忘れになりません。そして、「1コリント 15:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」パウロはここで、イエス様の復活の後にある、私たち自身の復活について話しています。私たちが復活した時に、主からの報いが与えられます。ですから、私たちはその報いをしっかりと目に留めて、労苦をいとわないということでしょう。

7 私が言っていることをよく考えなさい。主はすべてのことについて、理解する力をあなたに必ず与えてくださいます。

三つの喩えについて、「私が言っていることをよく考えなさい。」とパウロは言っています。これはとても大切なことですね、キリスト者は神の言葉について、信仰生活について、よく考えるという習慣が必要です。イエス様が少年であられた時、両親がエルサレムからガリラヤに帰るとき、なんと三日後にイエス様がおられないことに気づきました。エルサレムの神殿でイエス様は学者たちと議論しておられましたが、心配していたとたしなめたら、「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」と言われ、両親にはその言葉の意味が分からなかったとあります。けれども、「母はこれらのことをみな、心に留めておいた。(ルカ 2:51)」とあります。その時には分からなくても、心に留めておきます。パウロは、テモテのことを考えて、まだ三つの喩えの意味が完全には把握できないのではないかと、思いました。けれども、「よく考えなさい。」と勧めたのです。

そして、「主はすべてのことについて、理解する力をあなたに必ず与えてくださいます。」とありま

すね。これがキリスト者にとっての悩み所です。すぐに答えが欲しいのです、けれども主は、「わたしに信頼しなさい。」ということを経験的に言われます。しかし、霊的に成長するにしたがって、自分の今、置かれている所について、理解する力が与えられます。

## **2A イエス・キリストの福音 8-13**

### **1B つながれていない御言葉 8-10**

そして次に、恵みによって強くなるために、最も必要なことをパウロは教えています。

8 私の福音に言うとおりに、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい。

イエス・キリストのことを、いつも思っています。私たちが主の働きをして、何らかの困難を受けているとすれば、必ず、自分がつなげられている主イエス・キリストご自身が通られています。聖書を開き、福音書を開けば、まさにイエス様が自分に先んじてその苦しみや葛藤、いや、それだけでなく、喜びや感謝もすべて受けておられる姿を見ることができます。イエス様は、「弟子はその師にまさらず、しもべはその主人にまさりません。(マタイ 10:24)」と言われましたが、私たちがイエス様の受けなかった苦しみを特別に受けているなんてことは、ないわけです。ヘブル書 12 章にも同じ勧めがあります。「ヘブル 12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」

そしてパウロは、イエス・キリストのことを、「ダビデの子孫」そして、「死者の中からよみがえった」と説明しています。これは人として来られて、また神の御子として来られたことを意味する言葉です。ローマ 1 章で彼はこのように説明しています。「1:3-4 御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」人の子として生まれましたが、それもダビデの子として、約束のキリストを実現していました。さらに、復活によって、神の御子であることも公にしておられました。パウロが、ユダヤ人会堂の中で説教した時にこう言いました。「使徒 13:33 神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされました。詩篇の第二篇に、『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。』と書いてあるとおりです。」神によって生まれたという箇所は、肉体の誕生のようにおぎゃあ～と生まれたということではなく、復活そのものを指しています。

そしてパウロが、「私の福音に言うとおりに」と言っていることが興味深いです。もちろん福音は神の福音であり、そして全ての人にとっての福音です。けれども、パウロはこの福音をあまりにも個人的に受けとめていました。イエス・キリストが私自身の主であることを知っていました。チャック・スミスが初めて、ヒッピーのクリスチャンと出会った時に、その人が、「ついさっきまで、イエス様と

会話してきたように、イエス様について話していた。」と言っています。それだけ、イエス様が身近な存在であったのです。

9 私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことは、つながれてはいません。

「福音のために、苦しみを受け」という言葉ですが、福音の言葉ほど、迫害を受けたものはありません。神の言葉を何とかして無くしてしまおうとする試みは、歴史を通じて行なわれました。宗教改革前、聖書の翻訳というのは命がけでした。それを行なったので、火あぶりの刑に処せられたりしました。聖書を持っているというだけで、強制収容所に入れられ、辛酸をなめている兄弟姉妹が、今現在います。しかし、どんなに福音の言葉をやめさせようとしても、必ず立つのです。「1ペテロ 1:24-25」人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことは、とこしえに変わることがない。」とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことがこれです。」

そして、「神のことは、つながれてはいません」という言葉は、とても大事な御言葉です。パウロは物理的な制約を受けていました。しかし、それで神から与えられた使命を果たせないということではありませんでした。福音を語る、神の言葉を語るといういは、神ご自身が主のことはを広げてくださるので、自分の物理的制約に縛られることはないということです。イザヤ書にある言葉を思い出します。「55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」

そしてパウロは、第三次宣教旅行の終わり、エルサレムに向かう時にミレトでエペソの教会の長老たちに会いました。これから狼が教会を荒らして、またあなた方の中からも曲がったことを語るようになると予告しましたが、こう言っています。「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。(20:32)」このようにして、御言葉そのものが人々を神の国に受け継がせるようにするということを教えています。

10 ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。

パウロが、福音を聞いて救いの預かる人々を、「選ばれた人たちのために」と言っているのが興味深いです。彼がコリントにいたときに、主イエスが彼のかたわらに立たれて、こう言われました。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。…この町にはわたしの民がたくさんいるから。(使徒 18:10)」まだ、福音を聞いていないのに、その人々を「わたしの民」と主は呼ばれました。自分が人々を救うのではなく、神が救おうとして、選んでおられるということです。正確なことを忘れ

ましたが、ある人が宣教師の人を通して福音を聞いて、救われました。そしてその人が、「私は何十年も、この福音を知らずに生きていた。なぜ、もっと早く誰かが知らせてくれなかったのだろうか。」と言ったそうです。そうですね、神が救おうと選んでおられる人々がいます。私たちはその人たちに語り続ける必要があります。もちろん、神が誰を選ばれているか知りませんから、全ての人に語り続けます。

そして、救われるというのはどういうことか？それは、「とこしえの栄光を受ける」ということが目的です。しばしば救われることを、天国行きの切符に例えられる場合があります。しかし、それではあまりにも陳腐な約束です。そうではなく、神の栄光にしたがって人が造られたのに、罪によって損なわれてしまいました。それをキリストにあって回復することが目的であります。神のかたちに回復し、そして神の永遠の光を反映させながら生きるように召されています。その希望の中に私たちは生きています。したがって、御霊によって神の栄光を反映させるという生き方を今のうちにしていきます。

そしてこの人々のために、「すべてのことを耐え忍びます。」とあります。これがパウロの姿勢でした。「1コリント 9:19-23 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。律法を持たない人々に対しては、私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが、律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをと共に受ける者となるためなのです。」パウロのこの情熱は、イエス様の情熱から来ています。それは、羊を百匹飼っている羊飼いが、失われた一匹のために九十九匹を置いてしても捜しに行く、あの情熱です。ここに神の愛と情熱が注がれており、福音の働きに携わることは、この神の愛に触れることであります。

## 2B 共に生き、死ぬ 11-13

11 次のことばは信頼すべきことばです。「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。12 もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。13 私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」

「信頼すべきことば」という言い回しは、テモテへの第一の手紙にも、あった言葉です。初代教会の中で語り次がれている言葉で、パウロは「この言葉については、信頼できる。」と太鼓判を教えているのだと考えられます。ある注解書には、これは讚美歌の一部であろうとありました。また、バ



プテスマを受ける時の言葉であろうともありました。

一つ目は、「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。」初めからすごい信仰告白ですね。主は、「マルコ 8:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者はそれを救うのです。」と言われました。キリストが十字架への死の道を歩まれたように、キリストに結びつけられた私たちも、この死を自分の身にまとうことになります。もちろん、殉教するというだけの意味ではなく、自分のあり方を捨てて、キリストのあり方が自分を通して見えてくる生き方です。自分に死ぬときに、キリストが自分のうちで生きてくださいます。そして、死ぬならば生きるというのは、先ほど見た、復活の希望によります。主が死なれたけれども、甦られたように、私たちも死んでも甦るといふ信仰です。「ピリピ 3:10-11 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」

そして二つ目は、「もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。」であります。これは、ローマ 8 章 17 節に説明されています。「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。」治めるというのは、神のかたちの回復です。アダムに対して主が、地を従えよと命じられました。被造物を治めるということは、主が人に対して与えられた御心であり、それを全うすることによって、人が人として生きることができます。神が被造物を治めておられるように、神にあって被造物を治めます。主イエスは、テアテラにある教会にこのように約束されました。「黙示 2:26-27 勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。」キリストが諸国民を治められる時に、キリストにあって教会も治めます。

三つ目は、「もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。」です。福音を恥と思い、キリストを否むのであれば、キリストも私たちを否まれます。主は、「人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。(マタイ 10:33)」と言われました。信仰告白というのは、とても大切です。私たちが心で密かに思っているということ、以心伝心で伝わるということ、それと公に言い表すというのには大きな開きがあります。もちろん、心で信じます。けれども、ちょうど婚姻関係が同棲ではなく、公に責任を持つからこそその真実な愛が成り立つのと同じように、キリスト者の信仰は公にしていくものなのです。ですから、私たちの教会ではしていませんが、例えば多くの教会では使徒信条を毎週の礼拝で唱えているところがあります。バプテスマを受けるというのは、信仰を公にすることに他なりません。

四つ目は、「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」であります。これは慰めであります。三つ目のことをことごとく失敗してしまったのが、

あのペテロです。イエス様を三度も否みました。けれども、彼は主の憐れみによって回復しました。それがここにありますが、「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。」であります。神が真実であるから、今の私がいます。自分の真実ではなく、神の真実によって成り立っています。

これは、先の「恵みによって強められなさい。」につながります。自分の忠実さではないのです、神の恵みよって強められるのです。そして、イエス・キリストを思いなさいとあるように、主ご自身の憐れみに目を留めます。中国内地宣教の開拓者であるハドソン・テラーは、こう言いました。「私たちが忠実であろうとするのではなく、つねに真実であられる方から目を離さないことである。」そうです、神の真実を見ることによって、私たちも忠実の実を結ばせることができます。それが聖霊の力でもあります。1 章 14 節の言葉をもう一度思い出してください。「あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。」